

## 要 旨

本研究は、書こうとする文章の種類に応じて自分の考えを表現する力を育成するために、モデル文を活用した学習指導の在り方を探ったものである。児童が表現様式を視点にモデル文を比較し、相違点から表現の工夫に気付き、表現の効果について考える学習活動を取り入れた。この活動を通して、児童は文章の種類に応じた構成や表現方法を理解することができた。さらに、表現の工夫による効果を自覚した結果、自分の考えが読み手に明確に伝わるように、表現の効果を考えながら表現の工夫を活用して書いたり、より良い表現に書き直したりすることができるようになった。

〈キーワード〉 ①モデル文の比較 ②構成・表現方法の工夫 ③効果の自覚 ④表現する力

### 1 研究の目標

書こうとする文章の種類に応じて自分の考えを表現する力を育成するために、「書くこと」の領域の学習において、モデル文を活用した学習指導の在り方を探る。

### 2 目標設定の趣旨

小学校学習指導要領解説国語編では、国語科改訂の趣旨として、論理的に思考し表現する能力と伝え合う能力を育成するために、基礎的・基本的な知識・技能を習得し活用して課題を探求できるよう、言語活動をそれぞれの領域の内容に位置付けることを示している。「書くこと」の言語活動例として、日常生活に必要とされる様々な文章（詩、物語、報告文、新聞、説明文、手紙、随筆など）を書くことが挙げられており、書こうとする文章の種類に応じて、表現の効果を考えながら、読み手にもよく理解できるように書くことが重視されている。

平成27年度全国学力・学習状況調査〔4月調査〕（第6学年）では、取材した内容を整理しながら記事を書く設問から新聞の様式で書くことに課題が見られた。所属校6年生に特定の課題に関する調査（国語）の長文記述問題を使って実態調査を行ったところ、意見文の様式に合わせた段落構成や記述に課題が見られた。さらに、作文に関する意識調査から、「文の種類に合わせて書く」ことに多くの児童が困っていることが分かった。以上のことから、文章の種類に応じた構成や表現方法で書くことに課題があり、授業改善の必要があると考えた。

私自身の実践を振り返ると、児童は「課題設定」の過程で書く目的・相手意識をもち、意欲的に学習に取り組んだ。しかし、学習が進むにつれ、書くことに苦手意識をもっている児童の多くは、「構成」「記述」の過程で文章の種類に応じた表現方法を使うことができず、自分の考えが明確に伝わるように書くことができなかった。それは、「課題設定」の過程で文章の種類に応じた構成や表現方法について十分理解させ、「構成」「記述」の過程で理解した構成や表現方法を活用させて書かせる手立てが不十分だったからだと考える。平成26年度全国学力・学習状況調査の結果を受けた国立教育政策研究所の報告では、小学校国語科授業改善のアプローチの一つに「モデルや手引きの提示」が示されている。また、森田信義は、作文の動機付けとして、「実例を見せる・解説する」ことを挙げ、構成や表現方法を理解し、児童が自分の表現を生み出していけると述べている。モデルや手引きを提示し、学習活動における活用の仕方を教師が工夫することで、児童は文章の種類に応じた構成や表現方法を理解し、活用して自分の考えを読み手に理解できるように表現することができるように考える。

そこで、本研究では、研究テーマ、研究課題を受け、児童が書こうとする文章の種類に応じて自分の考えを表現する力を育成するために、「書くこと」の領域の学習において、モデル文を活用した学習指導の在り方について探りたいと考え、本目標を設定した。

### 3 研究の仮説

「書くこと」の領域の単元において、表現様式を視点にモデル文を比較し、表現の効果について考えさせれば、児童は書こうとする文章の構成や表現方法を理解し、活用するようになるであろう。

### 4 研究方法

- (1) 「書くこと」の指導及び「モデル文」を活用した指導に関する理論研究
- (2) 「書くこと」についての質問紙による意識調査及びワークシート、完成文の記述の分析、行動観察による変容の分析
- (3) 仮説を検証するための授業実践及び考察

### 5 研究内容

- (1) 文献及び先行研究を参考に、「モデル文」の内容、「モデル文」の提示方法、「モデル文」を提示する学習過程で理解したことを表現につなげるための手立てについて明らかにする。
- (2) 質問紙による意識調査、ワークシートと完成文の記述の分析及び行動観察により、文章の種類に応じた児童の表現力の変容を調査し、考察する。
- (3) 所属校の6年生における単元「この絵、私はこう見る」（3時間）、「忘れられない言葉」（3時間）において、授業実践を行い、手立ての有効性を検証する。

### 6 研究の実際

- (1) 文献等による理論研究

井上一郎は、児童生徒に文章の種類に応じた書く力が身に付いていないことの本質的な問題として、児童生徒が書くときに表現様式の特徴や表現過程の方法を強く自覚する活動を教師が取り入れていないことを挙げている。この自覚の中核となるのが思考力であり、児童が絶えずどのように考え、書く内容と表現法を高めるのか意識できるように単元を構成していくことの必要性を述べている。さらに、書くことの表現過程の中に「児童・生徒は、書き上げた時の完成した文章を多く読んでいるわけではないことや、目標を明確にするためにモデル学習が必要となる」<sup>(1)</sup>と述べ、模範文と学習者の例文や完成途中の例文や不十分な例文も含め、モデルを複数化することを提案している。また、松野孝雄は「考える力を育てるためには、『比べる』という思考ができなければならない。対比することで、対象となる言語表現を詳しく細かく見ることになる」<sup>(2)</sup>と述べている。

以上のことから、「モデル学習」の中で比較する活動を取り入れることは、モデルを詳しく細かく見るようになり、表現様式の特徴である構成や表現方法を理解させることに効果的だと考える。さらに、理解した構成や表現方法を絶えず意識して活用する手立てを取れば、文章の種類に応じて表現する力が育成できると考える。

- (2) 研究の構想

#### ア 研究の全体構想

本研究では、書くことの学習過程の中に、単元で身に付けたい力を踏まえた文章と児童の実態を踏まえた文章の比較を取り入れる（図1）。比較することで、構成や表現方法の相違点が明確になり、児童が主体的に表現の工夫を見付けやすくなると考える。さらに、表現の効果について考えさせることで、読み手を意識した書き手の意図を捉えさせることができる。それにより表現の工夫の必要性を自覚させ、構成・表現方法

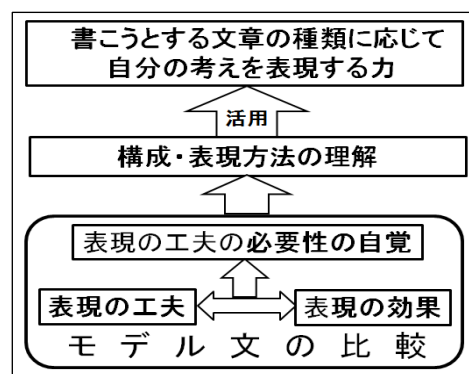


図1 研究全体構想図

の理解を促進させることになると考える。書こうとする文章の構成・表現方法が理解できると、それを使って書きたいという意欲が喚起されると考える。そして、理解した構成や表現方法を活用し自分の考えを記述したり推敲したりすることで、文章の種類に応じて自分の考えを表現する力が高まると考える。

イ モデル文の比較を取り入れた単元構成

本研究では、モデル文の比較を2つの学習過程で行う(図2)。1つ目は、課題設定の過程において行い、書こうとする文章の特徴をつかむことをねらいとする。2つ目は、取材と構成の過程の間に「モデル文の学習」の過程で行い、文章の種類に応じた構成や表現方法を理解させることをねらいとする。構成・記述・推敲・交流の過程では、理解した文章の種類に応じた表現方法を活用していく。モデル文から学習したことは、構成・記述の過程において、書くための資料となり、推敲・交流の過程において相互評価の観点となる。

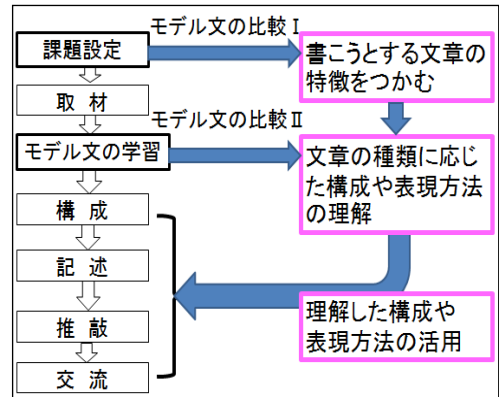


図2 モデル文の比較を取り入れた単元構成

ウ 実践化への手立て

(ア) モデル文の作成にあたって

モデル文を作成する際、井上が挙げるモデルとなる作品分析の観点を参考にした(資料1)。それは、「学習者の表現課題に即した物の見方や考え方の決定に貢献できるようにすること」「モデルを複数化すること」「表現モデルは、すぐに表現の工夫を読み取るのではなく、理解主体の立場から十分受容し、その良さを実感してから行うようにすること」である。これから、モデル文から目的意識・相手意識をもたせることができるように、様式・テーマなどの条件を明確にしておくことが必要だと考えた。さらに、本研究では、単元の指導目標が具体化された模範文や学習前の課題作文、日常の書く活動から児童の「書く力」を踏まえた例文などをモデル文として複数準備する。それらを比較する思考過程をとり、獲得した構成や表現方法を記述や推敲の過程で活用していく。その際、読み手の立場で表現の効果について考え、それぞれのモデル文の良さが実感できるようにした。提示したモデル文は、教科書に掲載されている教材文や教師自作の文章、児童作品を使った。単元の学習目標に応じて効果的に使用できるものを選択した。

- ①学習者の表現課題に即したパラダイム(物の見方や考え方)の決定に貢献できるように観点を明確に分析する。
- A 様式 B テーマ
  - C 表現主体の決定
  - D 理解主体の想定 E 表現構造
  - F 叙述 G 分量 H 用紙
  - I 時間 J 完成版
- ②モデルは複数化するとよい。
- ア 完成モデルを複数化する。
  - イ 表現の各過程に即して準備する。
  - ウ 大人の模範文(名文)と学習者の例文を活用する。
  - エ 完成途中のものや不十分な例も含める。
- ③ 表現モデルは、すぐに表現の工夫を読み取るのではなく、理解主体の立場から十分受容し、そのよさを実感してから行うようにする。

資料1 作品分析の観点(井上)

(イ) 「〇〇文マスターカード」の作成

「〇〇文マスターカード」とは、児童がモデル文から学習した構成や表現方法の工夫を第3時においてワークシートにまとめたものである(資料2)。これは、モデル文から学んだ構成や表現方法の工夫を共通理解させ、記述の過程において理解した構成や表現方法を使うポイントを示す資料となり、推敲の過程において相互評価の観点となり、単元の最後には自分自身が身に付けた力を振り返る観点にもなる。「〇〇文マスターカード」を作成するに当たっては、児童が書くときにその特徴や方法を強く自覚して活動を進めることができるように、

解説文マスターカード 項目	前	
① 問いかけ		一人学びとグループの交流
② 場所が分かる言葉		
③ 強調する言葉(おんが)		
④ 入りこむ言葉(おんが)		
⑤ 想像させる言葉(おんが)		
⑥ 行動が分かる言葉(おんが)		
⑦ 決めつける言葉(おんが)		しく出た意見全体交流で新
⑧ 強い主張		
⑨ 体言止め		
⑩ つなぎ言葉		
⑪ 何かにととえる。		
⑫ 筆者の考え		
⑬ 読者に注目		
⑭ 絵の作者が考えたことを想像		

資料2 解説文マスターカード

児童自身がモデル文を比較することによって表現の工夫を学び取れるようにする。まず、一人学びにおいてモデル文の比較から表現の工夫の相違点を出させ、それが与える表現の効果について考えさせる。次に、自分が考えた表現の工夫と効果についてグループで話し合わせる。その際、自分達のグループで出された表現の工夫の項目をマスターカードに記入する。最後にグループ交流で出された意見を全体で交流し合い、朱書きをさせマスターカードを完成させる。記述に当たっては、挙げた項目を全て活用するのではなく、自分の文章の中で効果が発揮できる表現を選んで良いことを知らせておく。

(ウ) 「作文の手引き」の作成

モデル文を使うと、画一的な文章が出来上がるのではないかと危惧される。そうならないために、既習の構成や表現方法をまとめた「作文の手引き」を準備する(資料3)。これは、書くことに苦手意識をもっている児童が文章を書く際に、目的に応じて参考にさせることで、自力解決を補助する。また、自分で書き進めることができる児童にとっては表現の幅を広げるための資料になると考える。

5	分かりやすい文を作ろう
6	書き出しの工夫
7	様子や気持ちを分かりやすく書く方法①
8	様子や気持ちを分かりやすく書く方法②
9	読み手の心に残るように、文を変身させよう
10	語句を使って、文を書いてみよう
11	こそあど言葉
12	似た意味の言葉
13	つながる言葉
14	つなぎ言葉
15	慣用句(体を使った言葉)

資料3 作文の手引き(抜粋)

(3) 検証の視点

仮説を検証するために、以下の視点を定める。

ア 【検証の視点Ⅰ】表現様式を視点にモデル文を比較し表現の効果について考えることが、文章の種類に応じた構成や表現方法を理解することに有効だったか

イ 【検証の視点Ⅱ】理解した構成や表現方法を活用して、自分の考えが読み手に伝わるように記述したり推敲したりできたか

(4) 検証授業の実際

仮説の検証に当たって、検証授業①として、第6学年の単元「名画から読み取ったことを解説文に書いて、全校のみんなに伝えよう」(全8時間)を11月に、検証授業②として、「卒業記念随筆集をつくろう～お世話になった方々に、自分の成長を伝えよう～」(全8時間)を1月に行った。検証授業①では、特に表現方法の工夫を、検証授業②では構成の工夫を意識できるモデル文を作成し、重点的に指導した。以降、検証授業②の第1時の課題設定の過程と第3時のモデル文学習の過程と第6時の推敲の過程を中心に述べていく。

ア 指導のねらいと実際

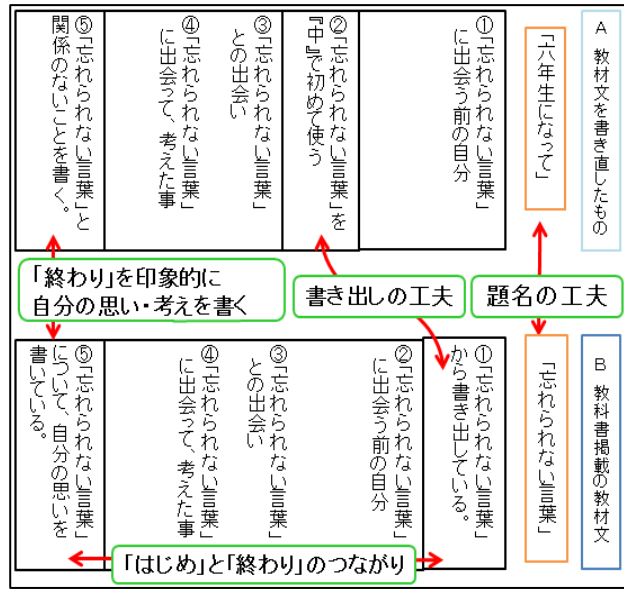
本単元の言語活動は「随筆を書く」である。学習指導要領解説国語編には「随筆は、身近に起こったこと、見たことや聞いたこと、経験したことなどを他の人にも分かるように描写した上で感想や感慨、自分にとっての意味などをまとめたものである」<sup>(3)</sup>と示されている。随筆を書く学習は、小学校では本単元のみである。これまで行事作文などで経験したことから考えたことを書くことはあったが、自分にとっての意味や価値まで深く考えて書く経験はない。そこで、自分の成長の過程をお世話になった方々へ伝える卒業文集作りを目的とし、相手意識、目的意識をもたせて取り組ませた。自分にとっての意味や価値付けを考えるきっかけになった出来事や経験などを読み手がよく理解できるように伝えるには、読み手を引き付ける構成や表現の工夫の必要性を自覚させ、随筆の表現方法を理解し、活用させることを指導のねらいとした。

第1時の課題設定の過程において、2つの文章を比較させ相違点から大まかな随筆の特徴をつかませる。随筆では特に、「終わり」の部分に「自分にとってどのような意味があるか」を深めて書くところに今まで書いてきた文章とは異なる要素がある。そこで、「終わり」の部分の表現内容の違いに着目させ、随筆の文章の特徴に気付かせることができるような2つのモデル文を作成し



た。これらは、模範文となる児童作文と児童の実態に応じて構成や表現方法を書き直したものである。相違点を発表させ全体で話し合うことで、大まかな文章の特徴や書く内容をつかませ、学習の見通しをもたせた。

第3時のモデル文の学習の過程においても、新たな2つの文章を比較し、表現の工夫から効果について考えさせることで、読み手を意識した書き手の意図を考えさせ、構成や表現方法を理解させる。モデル文は、教科書に掲載されている教材文とそれを書き直したものである。本単元では、特に構成の工夫について取り上げる。そのため、「題名の工夫や書き出しの工夫」、「『はじめ』と『終わり』のつながり」や「『終わり』を印象的に自分の思いや考えを書く」などの構成の工夫の違いに注目し、効果について捉えやすいようなモデル文を作成した（資料4）。2つのモデル文を比較し表現の工夫の相違点から効果を自分で考え、グループそして全体で話し合った後、「随筆マスターカード」に構成や表現方法をまとめ、共通理解をさせる。



資料4 第3時モデル文(A教材文を書き直したものと・B教科書掲載の教材文)

第6時の推敲の過程では、理解した表現の工夫を活用し、読み手に自分の考えをより伝えるために書き直しをさせる。一人学びでは、児童はまず、自分の文章を「随筆マスターカード」の観点に沿って自己評価する。その後、同様に観点に沿って友達の下書きを読み、付箋紙に質問や助言などを書く。グループの交流では、自分の表現上の悩みを相談し、友達から助言をもらったり、解決策を一緒に考えたりする。全体の交流では、助言してもらって納得したことや清書にどう生かしていくかなどを発表し、交流したことを生かして更に自分で推敲し、清書した。

## イ 授業の考察

- (ア) 【検証の視点I】表現様式を視点にモデル文を比較し、表現の工夫からその効果について考えることが、文章の特徴となる構成や表現方法を理解することに有効だったか

まず、第1時と第3時において、一人学びの段階でワークシートに書いた学級全体の構成の工夫の数の変容を分析する。本単元では、特に構成の工夫を理解し活用することを目的としており、「書き出しの工夫」「『はじめ』と『終わり』のつながり」「『終わり』に自分の思いや考え」「中をくわしく」「題名の工夫」について考えが出やすいようなモデル文を提示した。一人学びにおいて、モデル文を比較して構成の工夫に気付くことができた児童は第1時、第3時合わせて96%（25名）だった。構成を工夫した記述の数は全体で第1時で37個、第3時では49個になり増加している（図3）。このことから、モデル文の比較によって児童は、言語表現を詳しく細かく見ることができ、本単元のねらいである構成の工夫について着目することができたと考える。

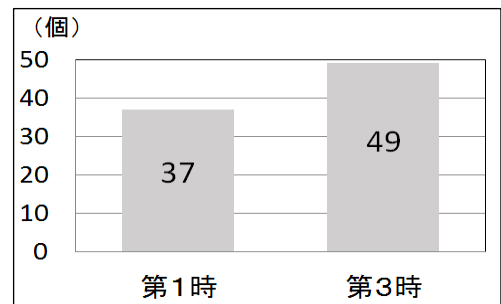


図3 構成の工夫の数

次に、表現の工夫から表現の効果について考えることができているか第3時のワークシートの記述内容から分析する。モデル文の表現の工夫を見付け、読み手がどのような感じを受けるか表現の

効果について、自分の言葉で書き表すことができた児童が92% (24名)であった。児童の中には、「書き出しの工夫には読み手を引き付ける効果があること」と書いていた児童が最も多く46% (12名)、次いで「題名の工夫には読み手が話の内容を理解しやすくなること、文章に入り込みやすくなったりする効果があること」や「『はじめ』と『終わり』がつながっている構成は、読み手に自分が伝えたいことをしっかり伝える効果があること」と書いていた児童がそれぞれ15% (4名)で、構成の工夫の効果について記述することができていた(資料5)。モデル文を比較したことで、読み手が感じる良さを実感することができ、表現の効果について考えやすくなったと考える。

最後に、第1時と第3時の振り返りから理解についての自己評価の変容を分析する。第1時後「随筆の表現の工夫について理解することができたか」という質問に対して「とても・まあまあ理解できた」と回答した児童は全体の88% (23名)をしめている。第3時後についても同様であった。また、「とても理解できた」と自己評価している児童が第1時で50% (13名)だったのが、第3時では65% (17名)に増加していることが分かった(図4)。それは、第3時において、モデル文を比較し効果を考えた上で随筆の特徴を含んだ構成の工夫の観点を出し合い、「書き出しの工夫」「はじめと終わりのつながり」「終わりに自分の考えを書く」「中をくわしく書く」「題名の工夫」の5つにまとめることができ、「随筆マスターカード」に記入して共通理解を図ることができたからだと考える。児童は、随筆の特徴を捉え、書き方を理解し、書くことの見通しをもつことができた。

これらのことから、表現様式を視点をモデル文を比較し表現の効果について考えることは、文章の種類に応じた構成や表現方法を理解することに有効だったと考える。

(4) 【検証の視点Ⅱ】理解した構成や表現方法を活用して、自分の考えが読み手に理解できるように記述したり推敲したりできたか

第6時の推敲の過程において検証する。全体の傾向として児童の観察及び推敲時の相談した観点と助言の内容について分析する。児童は、「モデル文」や「随筆マスターカード」「作文の手引き」を参考にしながら、理解した表現方法を活用して記述したり推敲したりする姿が見られた。また、推敲の過程におけるグループの交流のはじめに、自分の表現上の悩みを相談する時間をとった。そ

☆表現の工夫

- ①の最初からおもしろい話をして、と書いてある。
- ②「おもしろい話を自然と読んでいくのが好き」
- ③「おもしろい話を自然と読んでいくのが好き」
- ④「おもしろい話を自然と読んでいくのが好き」
- ⑤「自分の気持ちを書き出すのが好き」

★表現の効果(読み手が感じる良さ)

- ・読み手が、おもしろい話だと感じられる。
- ・読み手が、おもしろい話だと感じられる。
- ・読み手が、おもしろい話だと感じられる。
- ・読み手が、おもしろい話だと感じられる。
- ・読み手が、おもしろい話だと感じられる。

また、そのように工夫することで、読む人にどんな効果を与えるでしょうか。

☆表現の工夫

①AとBの文章には、同じところがあるところがあります。ちがうところから、Bの文章の随筆らしい表現の工夫をさがしました。

また、そのように工夫することで、読む人にどんな効果を与えるでしょうか。

☆表現の効果(読み手が感じる良さ)

・読み手が、おもしろい話だと感じられる。

・読み手が、おもしろい話だと感じられる。

・読み手が、おもしろい話だと感じられる。

・読み手が、おもしろい話だと感じられる。

・読み手が、おもしろい話だと感じられる。

資料5 第3時表現の工夫と効果についての記述

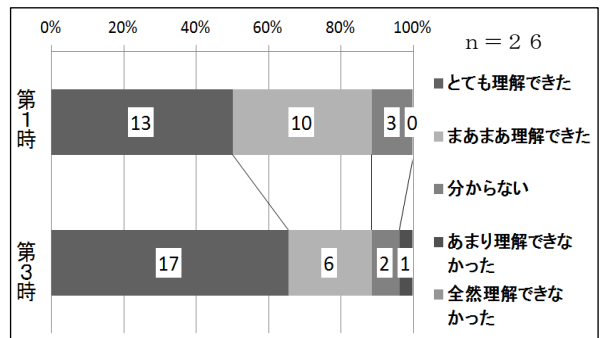


図4 随筆の表現の工夫についての理解

の際、69%（18名）が本単元のねらいである構成の工夫に関わる観点について相談をしていた（図5）。このことから、モデル文の比較が構成の工夫に着目させることができいたため、記述の過程において構成の工夫について意識して取り組んでいたことが分かる。

さらに、相談を受けて助言した内容を見ると、「題名をもっとよくしたい」に対して「自分が強調したいことを書くといい」、「終わりをもっと詳しくしたい」に対して「体験したことをこれからどのように先に生かすかを書くといい」などがあった（資料6）。これらは、モデル文から読み取れる内容で読み手の立場からモデル文を比較し、表現の工夫から効果について実感したことが生かされている。検証授業前の推敲では、漢字の間違いや句読点の付け方など表記上のものがほとんどだった。しかし、検証授業後は、モデル文の比較から文章の構成や表現方法について学習したことが生かされ、表現の工夫について悩み、相談して推敲することができている。さらにグループの話し合い後も自分で推敲を重ね、より良い表現を目指して書く姿が見られた。

推敲前の下書きの文章と推敲後の完成文で活用された構成の工夫（書き出しの工夫・はじめと終わりのつながり・終わりに自分の思い、考え・中をくわしく・題名の工夫）の5項目において、活用の変容を分析する。特に「はじめと終わりのつながり」を書いていたのは、下書きでは11名だったが、推敲後は24名に増加している。「終わりに自分の思い、考え」を書いていたのは、下書きでは14名だったが、23名に増加していた（図6）。このように、下書きでは活用した項目に偏りが見られたが、推敲後の完成文では、平均23名が活用し、偏りがなくなっていた。つまり、モデル文の比較で理解したことを推敲の観点として文章を見直したことで、さらに表現の工夫の活用が促され、自分の文章に表現の工夫を取り入れることができた児童が増えたと考える。しかし、「中をくわしく」書いている児童が他の項目より少なかった。題材や内容に沿った具体的な声かけが必要だったと考える。

清書後に児童が構成や表現方法について工夫したことを記述した内容を分析する。児童は、「読みやすいように段落を考えた」「印象に残るようにするために、問いかけから書き出した」「読む人が興味をひかれるように題名を工夫した」「『不安でいっぱいだった』を『不安で心が締め付けられる』とし、その時の辛かったことを深く読み手に伝えるようにした」「読む人が分かるように文を短く切った」など85%（22名）が表現の効果を理由として挙げることができた。このようなことから、モデル文を比較し読み手が感じる表現の効果について考えることで、表現の工夫の必要性を自覚することができた。そして、自分の考えを読み手に明確に伝えるために必要な構成や表現の方法を選び、活用していると考えられる。

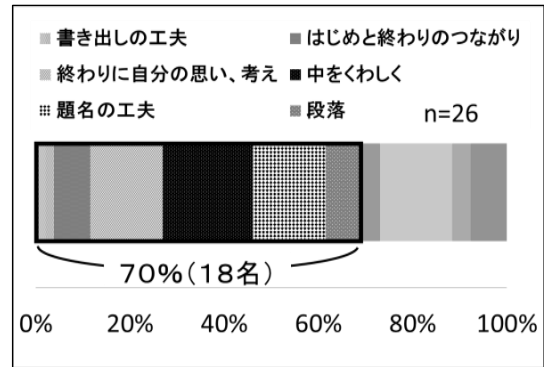


図5 推敲時相談した観点

表現の工夫をたくさんしたい。→アールを見ればこれに合った自分の気持ちを探したいよ。  
 題名をもっとよくしたい。→自分が強調したいことかいいよ。  
 終わりをもっとくわしくするためにはどうしたらいいの？  
 そのことをどのようにこの先いかすかをかいたら？  
 はじめと終わりのつながりもうちよと付けかえなど。  
 (終わりに書いている事をはじめにもってきた)

資料6 相談した内容と回答の記述

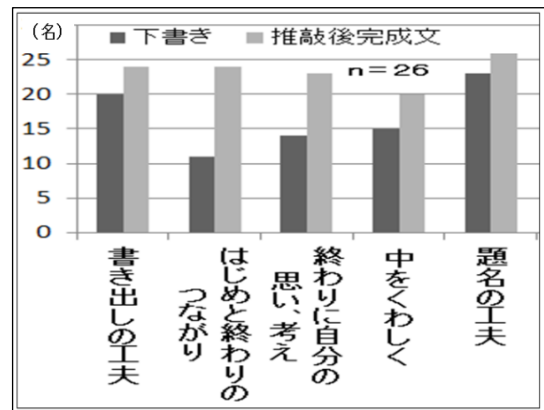


図6 構成の工夫の変容



次に、抽出児3名を挙げ、第1時、第3時、第6時のワークシート及び完成文を分析する(表1)。さらに、同じグループの児童の助言の内容からモデル文の比較から理解した表現の工夫を活用して助言することができているか検証する。

表1 抽出児のプロフィール

	A児	B児	C児
書くことの実態	意欲はあるが、自分の考えを整理し納得して書き始めるのに時間がかかる。最後まで書けずに終わることがある。	話すのは得意だが、自分の考えを文字で表現することに苦手意識があり、短い文章で終わってしまう。	理解が早く語彙が豊富で自分の考えを話すことも書くことも得意。長い文章を書くことができる。

A児は、第3時の一人学びにおいて、書き出しの工夫について書くことができていたが、授業後の自己評価では随筆の特徴や表現方法について「理解できたか分からない」と不安を見せていた。下書きでは、題材選びに迷い構成に十分な時間がとれなかったためか、目標を800字以上としていたが400字を書くことで精一杯だった。しかし、モデル文から自分で見つけた書き出しの工夫をすることはできていた。第3時で作成した「随筆マスターカード」を使って、下書き後の文章を自己評価し、『中』をどのように書いたらいいか分からない」とグループの友達に相談することができた。それに対して「きっかけを具体的に書く」「友達関係の昔と今を書く」など具体的な助言をもらった。さらに『終わり』にもっと自分の考えの変化を書いた方がいい」という助言ももらうことができた。その後、数回の推敲を重ね、完成文では、友達とのけんかの内容や自分の言動など詳しく書いたことで、終わりに「あやまる勇氣」の大切さを述べ、読み手にも自分の成長がよく理解できるように構成の工夫をすることができた。「随筆マスターカード」から推敲前後の表現の工夫の変容が分かる(資料7)。さらに、推敲前後の「終わり」の文章を比べても、随筆の特徴である自分にとっての意味付けが書かれているのが分かる(資料8)。このように、モデル文の比較から自分で見つけた書き出しの工夫だけでなく、よりよい文章を目指して、「随筆マスターカード」から構成の工夫を選びアドバイスを求めている姿から、理解したことを生かしたと考える。

随筆マスターカード(構成)		前	後
1	書き出しの工夫	○	○
2	はじめと終わりのつながり	○	○
3	終わりに自分の思い、考え	○	○
4	中をくわしく	○	○
5	題名の工夫	△	○
随筆マスターカード(表現方法)		前	後
1	体言止め	○	○
2	たとえ	○	○
3	言葉選び	○	○
4	会話「 」	○	○
5	大切な言葉「 」でかこむ	△	○
6	様子をくわしくする言葉 音、	○	○
7	つなぎ言葉(でも、そして)	○	○
8	強調(そうなのだ)	○	○
9	自分の思いや考えを表す文末(～だろう。～にちがいない。)	○	○
10	常体と敬体の統一	○	○

資料7 A児の随筆マスターカード

学校は、勉強や学校の行事を学んだりするだけと思っていたけど、その考えは間違っていた。勉強をするだけではなく、友達と仲良くすること、友達の大切さ、「こめんなさい」とあやまる勇氣なども学ぶ場なのだ。これらのことは、自然に分かるくらい色々なことがあって学ぶことができた。面と向かって悪口を言った時もあった。でも、素直にこめんなさい」と言うことができるようになった。そして、それが友達といい関係を続けていく大切な言葉だと実感した。私は、あやまる勇氣をもてた。

清書

「六年生になつて、中学校が遠い友達もいる。六年間、ま、たく同じ道ではないけど、一緒に協力して進んだ。これからは先、活していきたい。」

下書き

資料8 A児の推敲前後の変容

B児は、第3時の一人学びにおいて、モデル文が「忘れられない言葉」を中心に書かれていることや、「はじめ」と「終わり」を「忘れられない言葉」でつなげているところなどを表現の工夫として挙げるすることができた。その表現の効果について「伝えたいことが分かりやすくなる」や「印象に残る」と考え、ワークシートに記述している。下書きから、「できなかった、やらなかった、どちらだろう」という忘れられない言葉を中心に書き、「はじめ」と



「終わり」に中心となる言葉を配置して、読み手に伝えたいことを印象付けた(資料9)。また、清書後自分の文章の表現の工夫について質問したところ「題名の言葉を文中に出した」「最初と最後をつなげるようにした」など6項目挙げることができ、中でも「決めつける言葉の『～だ』を使って、読みやすく覚えやすくした」と、表現の工夫を使って、読み手に与える効果を理由に記述していた(資料10)。このようなことから、モデル文から学習した表現の工夫と効果について理解し、自分の随筆に活用することができたと考える。

夏休みのある日、出かけていたら、あるボスターが目に入った。「できなかった、やらなかった、どっちならう」。意味は、したけどできなかった。最初からしなかった、どっちならうという意味だ。ぼくは、これを見て、ぼくもいろいろと挑戦してみようかなと思った。  
二学期のある日(中略)そこで、母と相談して行くことにした。  
最初の日(中略)とにかく楽しかったのだ。本番当日(中略)結果は最下位だったけれど、とても楽しく、達成感があふれた。  
「できなかった、やらなかった、どっちならう」。この言葉に出会ってからはいろいろなことに挑戦できるようになってきた。できないと分かっていたとしても、とりあえず挑戦することが大事だと、あのボスターは伝えてくれた。

資料9 B児の完成文(随筆)

C児は、1時目の振り返りで「自分の成長したことを書いたとしても、それで何を得てどう考えるのかということを書いた方がいい」と書いており、随筆の特徴をしっかりと捉えていることが分かった。その後、運動会のスタンプを題材に選んで意欲的に取り組むことができた。記述の過程では、書き出しの工夫や「終わり」に自分の考えも書くことができており、構成の工夫を活用することができていた。推敲におけるグループの交流では、よりよい随筆を求めて友達の「一文をもっと短くして分かりやすくした方が読みやすい」などのアドバイスを受け何度も推敲を重ねて清書することができた(資料11)。このような助言は、モデル文の比較から『中』を詳しく書くことで、終わりに説得力が増すことや「短い文章でテンポよく進めることで、読みやすくなる」ということを学習した成果だと考える。

抽出児3名は、「こんな構成や表現方法を使って書きたい」という明確な目標をもって記述や推敲に取り組んでいた。これは、全体も同様であった。さらに、理解した表現の工夫や効果を踏まえて助言していることが分かった。このように、活発な交流ができたのは、推敲の観点となる構成や表現方法について理解していたからだと考える。以上のようなことから、読み手を意識して表現の効果を考えながら、理解した構成や表現方法を活用して記述したり、推敲したりすることができたと考える。

ウ 児童の意識に関するアンケート調査結果分析と振り返りの記述による考察

1月の検証授業終了後に行ったアンケート結果を分析する(図7)。「読み手に自分の考えがわかりやすいように、表現の工夫を使って書いていたか」という質問に対して児童全員が「とても・まあまあ書けた」と回答した。さらに、「とても」と回答した児童が11月事前調査では、15%(4名)だったものが、1月事後調査では81%(21名)であった。学習を重ねるごとに活用する際に必要な読み手意識が強くなっており、表現の工夫を使おうという意欲が高くなってきていることが分かった。また、

「」を使っていろいろな表現をした。  
動物をたとえたりして工夫した。  
自分の気持ちは表現するときに「」を使ったりした。  
最初と最後をつなげるようにした。  
決めつける言葉などをつけてよめやすくおぼえやすくした。  
題名の言葉を文中に出したりした。

資料10 B児の表現の工夫

推敲前 ↓(二文の長文)  
ぼくたちのような人が一番下で支えるので、これをすると言がつかれたりだれかがバランスをくずすと全体もくずれるのでとてもきんちょうする。  
(推敲後) ↓(三文の短文)  
力のある人や大きい人などが一番下で支えていた。支えていると言がつかれた。だれかがバランスをくずすと全体もくずれるのでとてもきんちょうする。

資料11 C児の推敲前後の文章

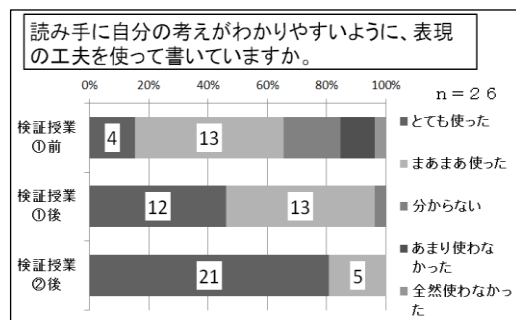


図7 児童の意識の変容

「モデル文の比較は、表現の工夫を考えたり書いたりすることに効果があるか」と質問したところ、96%（25名）の児童が「ある」と回答した。モデル文を比較する良さについて質問したところ「比べることで表現の工夫を見付けやすかった」46%（12名）、「読み手にとって分かりやすい文章かどうか比べて考えることができた」19%（5名）、「文章の特徴が分かりやすい」15%（4名）、「2つのいいところを見つけて、工夫を参考にして書きやすい」19%（5名）と記述していた。読み手の立場になって比べることで表現の工夫が捉えやすくなり、その後の書く活動につながっていることが分かった。さらに、6月の意識調査で文章を書くことに苦手意識をもっていた児童14名全員が「文章を書くことが、前より得意になった」と回答した。また、事後の振り返りの中で児童は、「初めは随筆って難しそうだったけど、表現の工夫をみんなで見つけて特徴を覚えれば簡単だった」や「新しい文章を書くときに、勉強したことを使いたい」と書いており、モデル文から学んだことを活用してまた新たな種類の文章を書こうと意欲を見せている児童もいた。これらから、モデル文を比較し、表現の工夫やその効果について考えたことで、構成や表現方法を理解することができ、それらを活用して、読み手に自分の考えが伝わるように自分で書き進めることができたと考える。

## 7 研究のまとめと今後の課題

### (1) 研究のまとめ

本研究を通して、次のことが明らかになった。

- ・モデル文を比較し、表現の工夫からその効果について考えさせたことで、表現の工夫の必要性を自覚し、書こうとする文章の構成や表現方法についての理解を促進させることができた。
- ・書こうとする文章の構成や表現方法を理解したことで、書くことに苦手意識をもっていた児童が意欲的に書き進めることができた。
- ・多くの児童が表現の効果を考えながら、自分の考えが読み手によく理解できるように文章全体の構成や表現方法を自分の文章に生かすことができた。

以上のように、モデル文を比較し表現の効果について考えさせることは、文章の種類に応じて自分の考えを表現する力の育成に有効であったと言える。

### (2) 今後の課題

- ・他学年の指導事項を踏まえたモデル文の活用の在り方
- ・学習した構成や表現方法を定着させるための「書くこと」の日常的な取り組み

### 《引用文献》

- (1) 井上 一郎 『書く力の基本を定着させる授業 書けない子を書けるようにする』 2007年 明治図書 p.14
- (2) 松野 孝雄 『論理的な記述力を伸ばす授業づくり』 2010年 明治図書 p.121
- (3) 文部科学省 『小学校学習指導要領解説国語編』 平成20年 東洋館出版社 p.85

### 《参考文献》

- ・横浜小学校国語教育研究会 『6年間でみるみる「思考力」が付く「書くこと」の授業プラン&ワークシート』 2014年 明治図書
- ・国立教育政策研究所 『全国学力・学習状況調査の結果を踏まえた学習指導の改善・充実に向けた説明会説明資料』 平成26年
- ・井上 一郎 『ことばが生まれる—伝え合う力を高める表現単元の授業の作り方』 2004年 明治図書
- ・森田 信義 『表現教育の研究』 1989年 溪水社